



號一十六第 月十年七十和昭 行發日十・回一月每 錢五部一價定 錢十六(共稅)分年一 一才 田杉 編集行發 國公谷比日區町廳市京東 社信通盟同 所行發

使命達成に邁進

岩永前社長の徳を偲び

大同結盟、職域に敢闘

社長 古野伊之助

一大綜合編輯室實現

この前の大詔奉戴日に一寸申上げたやうに、どうやら地下の編輯室が半敷上陸出来て、今日ここに不自由ながらも一階に集つて今日の奉戴日を迎へることが出来たのは非常に喜ばしいことだと考へてゐます。地階の生活九ヶ月の後に漸く一階に上り得て、近く一大編輯室が實現すれば、ここにわれわれの職場、われわれの戦場がやや整備され、この大東亞戦争をめぐる世界思想戦に力いつばい、根限り働きて得る陣容が整つて行くのではないかとと思ふ。

早く地階から一階に上りたいと始終考へてゐたが、相手仕事であるため急速には行かなかつた。この間病人が出た話なんか聞く度に胸を痛めたわけであるが、これからは恐らく通信社の編輯室としては先づ現在のやうな建物の不自由の情勢下では理想的な仕組みが出来来るのではなからうかと思ふ。どうか諸君もこの機会に心氣一轉して、さらに一段の努力を拂ひ、われらの職場を、われらの戦場を護

つて戦ふ決意をいよいよ確乎たるものとして頂きたいと考へます。

敵國より同志歸る

今日大詔奉戴日を迎へて思ひ起すことは丁度九ヶ月前に日米の風雲いよいよ急をづけるや、在外支社社員に對しそれぞれ時局の激變に應じて臨機の處置をとるやうに訓電を發したのに對し、在米、在英ともに出先の諸君が、將兵が前線で戦ふと同じやうな氣持に立つてそれぞれ職場を護つて訣別の電報を寄せて來たことを思ひ起すのである。

いつかの機會に、この席上においても二、三のさうした電報を讀み上げたかと記憶してゐるが、われら同盟死の同志は、全世界にわたつて報道報國の使命に精進してゐるのである。敵國に捕はれる身となるに先立つて、決死の覺悟をもつて職場を最後の瞬間まで護らうといふ決意は、その寄せられた電報に強く滲み出てゐた。故國がこの有史以來の大戦争に直面して、われわれがそれぞれの職場において決死の奮闘をなさんとす

決意を、さらに鼓舞するものがあつたのである。

その在米特派員諸君も、爾來九ヶ月の歳月が流れて、いま無事に故國日本へ歸ることが出来た。近くまたイギリス官憲によつて抑留されてゐた同志諸君も、故國の土を踏むことが出来た。

かやうにして一人残らず敵國に抑留監禁された同盟の同志が、みんな無事に元氣でわれわれの仲間に戻つて來ることは、これまたこの上ない喜びである。

同時にまたアリユンシヤンとかビルマとか、今現に第一線に生死の巷を往來して奮闘してゐるわれらの同志もいづれ三々伍々歸還して來るのである。

かやうにして思想戦の第一線に立つて活躍するわれらの同盟には戦争の體驗を経、苦闘を續けて來た諸君がどんどん、われらの懐に戻つて來てゐるのである。恐らく日本國中どの民間團體をみてもわれらの同盟のごとく今次の戦争に直接關連をもつて幾多の異れる地域に、また種々様々の體驗をもつて戻つて來てゐる同志を、わが同志として國家のために働きて得る團體はなからうと思ふのである。

なほこれから續々南方に同盟の同志が繰出して行くであらうが、また戦争勃發以來南方で苦闘した諸君も戻つて來ることと思ふ。か

つてわれら同盟の國家的使命の達成に一心一體となつて努力して

行かなければならないといふことを深く考へるのである。

岩永前社長を偲ぶ

かやうに同盟が、この大きな世界變局、有史以來の大戦争に直面して同盟本來の使命達成のためにわれわれの同志が或は全世界の各地から本國へ歸つてゐる。しかし一意報道報告の使命に邁進しつつある姿を眺めながら、思ひ起すことは三年前に亡くなつた前社長である。

九月二日岩永郎で第三年祭に列し、これまた月日の流れるのが早いのを驚いてゐるのであるが、三年前の九月二日、歐洲動亂勃發の前日に突如として輕井澤の山莊に岩永社長を失つたのである。

岩永前社長の半生は恰もこの大東亞戦争遂行のために、國家の思想機構を確立するために捧げた一生であつたといふことをつくづく思ひ起すのである。

わが國の國家代表通信社建設の芽生えは丁度この前の第一次世界大戦勃發の當時に始まつたのであります。

このときわが國の最初の對外的通信社が生れた。その當時の世界通信界の情勢はイギリスとアメリカとフランスが大體世界を三分した形であつた。歐洲大陸と南米はフランスのアダスの領域であつた。イギリス帝國および極東は完全にイギリスのロイテル通信の勢力下にあつた。アメリカの國力は今日ほどではなかつたので A.P. は北米合衆國に限られてゐた。

しかし日本はこのイギリス帝國の勢力圏内にあり、イギリス本國から漸次極東の各領地に世界のニュースを流して來るのが、點々と途中で落つちながら上海からそ

のおこぼれを頂戴して、上海經由ロイテル電報と稱して、これによつて世界の情勢を覗いてみたといふ姿であつた。

偉業遂に完成

この情勢の間に第一次世界大戦が勃發して、たまたま日本最初の對外通信社が生れた。しかもこの對外通信社は日本人に經營させる人を求めることが出来ないものでイギリス人ジョン・ラッセル・ケネデーの統率下に十年の間置かれてゐたのであります。

その當時からこの國際通信社は早く日本人の經營に移さなければならぬといふので、遂に選ばれて立つたのが岩永前社長である。即ち岩永氏は日本人として、はじめの日本の對外通信機關の主宰者となられた人であります。

かくて岩永前社長は自分と興へられた國家的使命、その理想の實現の眞意を解して終始一貫、通信事業に携はられた。

西部日本報道協議會結成

福岡支社提唱騎旋の西部日本報道協議會は九月二十九、三十兩日にわたり福岡市で開催西部軍司令部會議室で結成を終つたが、本機關を通じた軍の指導方針の徹底と國民總力の結集を圖り以て大戦完遂に資する事となつた。軍でもこの計畫に全幅的賛意を表するとともに本省から派遣官として報道部の堀田中佐を特派せしめ管下各師團報道部長全部參會、新聞、放送映配、日映等の報道宣傳關係者は遠く沖繩、鹿兒島、高知、徳島、島根等管内一社の缺席もなく参加し盛大に舉行、全國各軍管區に魁けて結成し、今後のより効果的運

用について懇談したが派遣官も此の種軍と報道宣傳業者との大同團結の機會は今回の實績に徴し非常に有効と思ふから本省へ歸還報告の上全國各軍管區にも至急結成させる事にしたといふ語り、西軍でも今後の運用について大なる期待をもつてゐるが、同時に今後の運用についても同盟各地支社局の援助協力を希望するといつてゐる。

佐賀支局開設

佐賀市に左記の通り支局を開設した。
佐賀市松原町六二
(佐賀合同新聞社内)

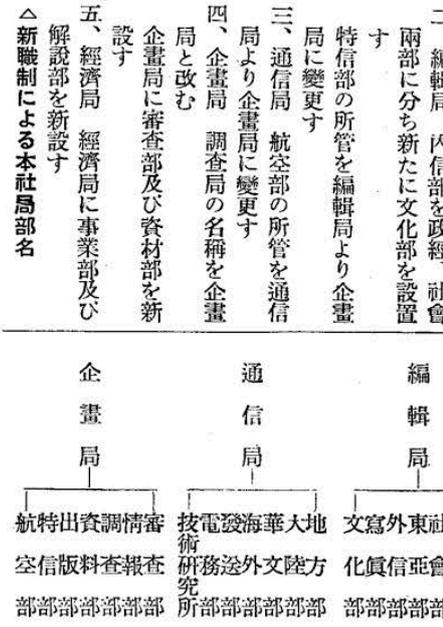
松山支局移轉

松山支局は左記へ移轉した。
松山市大手通一丁目五二
(愛媛合同新聞社内)

本社職制改正並に人事異動

△職制改正の件(同状五二)

本社職制の一部を左の如く改正す
一、總務局 文書部を庶務部と改稱し新たに資材部及び厚生部を設置す
二、編輯局 内信部を政經、社會兩部に分ち新たに文化部を設置す
三、通信局 航空部の所管を通信局より企畫局に変更す
四、企畫局 調査局の名稱を企畫局と改む
五、經濟局 經濟局に事業部及び解説部を新設す
△新職制による本社局部名



社長訓示

(前頁より續く)

尊い犠牲に報ぜん

さればこそ、今日の同盟が、今日の陣容をもつて泰然自若としてこの世界的變局に直面して、日本國民の聲を全世界に徹底するに何等躊躇することなく、また何等氣おくれすることなく、日本の聲を全世界に傳へてゐる。この組織の完成、それに先立つて岩永前社長は地上の生命を終つて遂に逝かれたのである。

この大きな遺産を引継いだわれわれ同盟の同志としては、精いっぱい、この機關の機軸を發揮して尊い岩永氏の犠牲に報ひなければならぬと思ふ。

またかくすることが、われわれ日本國民として今日前線にわれわれの同胞骨肉が骨を碎き、血を流して戦つてゐる努力に報ひる所以であると考へる。
どうか、かうしたわれわれの任務の重大さ、使命のますます大きくなることを思ひ起して、絶えず諸君は自らを鞭撻して戴きたいと考へるのであります。何處までもこの同盟同志三千は大同結盟の精神に燃えて、この國家的使命の達成に一路邁進するのみである
本社職制改正を斷行

右職制改正に伴ひ本社各主任以上の職に在る者は一應解任し新たに九月二十一日附左記の通り任命す
△總務局
局長 倉山 敏行
主査常務理事 塚本 義隆
參事(兼) 石部 幸次
參事 岡崎幸次郎
參事 長林 密藏
參事 神子島 裕郎
參事 船木 重光
參事 伊藤 勝司
參事 山崎 義人
庶務部長(部長待遇) 杉田 才一
庶務部次長 高橋興三治
文書主任 塚本 義隆
經理部長(兼) 塚本 義隆

およばずながら私自身が陣頭に立つて諸君とともに力限り戦ひたいと思つてゐるわけでありませう。近く職制をいくらか變更して相當多數の人事異動を行ふことと思つてゐますので、これに先立つて私の心境をこゝに申述べて、今日の話を終ります。(九月八日大詔奉戴日訓示)

編輯局	局長 倉山 敏行	主査常務理事 塚本 義隆	參事(兼) 石部 幸次	參事 岡崎幸次郎	參事 長林 密藏	參事 神子島 裕郎	參事 船木 重光	參事 伊藤 勝司	參事 山崎 義人	庶務部長(部長待遇) 杉田 才一	庶務部次長 高橋興三治	文書主任 塚本 義隆	經理部長(兼) 塚本 義隆
通信局	局長 倉山 敏行	主査常務理事 塚本 義隆	參事(兼) 石部 幸次	參事 岡崎幸次郎	參事 長林 密藏	參事 神子島 裕郎	參事 船木 重光	參事 伊藤 勝司	參事 山崎 義人	庶務部長(部長待遇) 杉田 才一	庶務部次長 高橋興三治	文書主任 塚本 義隆	經理部長(兼) 塚本 義隆
企畫局	局長 倉山 敏行	主査常務理事 塚本 義隆	參事(兼) 石部 幸次	參事 岡崎幸次郎	參事 長林 密藏	參事 神子島 裕郎	參事 船木 重光	參事 伊藤 勝司	參事 山崎 義人	庶務部長(部長待遇) 杉田 才一	庶務部次長 高橋興三治	文書主任 塚本 義隆	經理部長(兼) 塚本 義隆

總務局	局長 倉山 敏行	主査常務理事 塚本 義隆	參事(兼) 石部 幸次	參事 岡崎幸次郎	參事 長林 密藏	參事 神子島 裕郎	參事 船木 重光	參事 伊藤 勝司	參事 山崎 義人	庶務部長(部長待遇) 杉田 才一	庶務部次長 高橋興三治	文書主任 塚本 義隆	經理部長(兼) 塚本 義隆
編輯局	局長 倉山 敏行	主査常務理事 塚本 義隆	參事(兼) 石部 幸次	參事 岡崎幸次郎	參事 長林 密藏	參事 神子島 裕郎	參事 船木 重光	參事 伊藤 勝司	參事 山崎 義人	庶務部長(部長待遇) 杉田 才一	庶務部次長 高橋興三治	文書主任 塚本 義隆	經理部長(兼) 塚本 義隆
通信局	局長 倉山 敏行	主査常務理事 塚本 義隆	參事(兼) 石部 幸次	參事 岡崎幸次郎	參事 長林 密藏	參事 神子島 裕郎	參事 船木 重光	參事 伊藤 勝司	參事 山崎 義人	庶務部長(部長待遇) 杉田 才一	庶務部次長 高橋興三治	文書主任 塚本 義隆	經理部長(兼) 塚本 義隆
企畫局	局長 倉山 敏行	主査常務理事 塚本 義隆	參事(兼) 石部 幸次	參事 岡崎幸次郎	參事 長林 密藏	參事 神子島 裕郎	參事 船木 重光	參事 伊藤 勝司	參事 山崎 義人	庶務部長(部長待遇) 杉田 才一	庶務部次長 高橋興三治	文書主任 塚本 義隆	經理部長(兼) 塚本 義隆

英國から歸つて

前ロンドン支局長 長谷川才次

「酔ふて沙場に臥す君笑ふ莫れ
古來征戰幾人か還る」

抑留所に酒のある道理はなく、従つて「沙場に臥す」醜態を演ずるわけもないが、薪を割り乍ら、或は便所の掃除をし乍ら、獨り口吟んだのは、唐詩の一節だ。寔に迂闊な話だが、新聞人も戦死することがあるといふことを感付いたのは、支那事變の初め上海支社で臨時勤務した時が初めてだ。昭和十二年八月十四日の午前だつたらう。支社の編輯で新聞を讀んでゐたら、「颯爽」と姿を現したの

は意外にも支那空軍のノースロップ型十数機であつた。臆病で且つ勝手が分らぬ記者は餘り危険地帯には近付かなかつたが、總領事館構内に爆弾が落ちて、當時の松本支社長が九死に一生を得たことを人生のベスト・バートの五年間が

全く空廻りに終つたのだから丹精を盡くして育て上げた愛見に死なれたのと同じわけだ。

死ぬまでに大人に

八釜しいことをいふやうだが、そこで凡夫といへども人生の根本義諦を考へざるを得ない。御同様出世主義の教育を受けた我々は、子供心に大臣大將を夢見るのが例だつたが、二十歳近くになつて少し物事を考へるやうになると世俗的な榮達を人生の目標とすること

を積んで尺どなし、尺を重ねて丈となす」とでもいつた氣持ちで粒々辛苦の上、築き上げた支局長が戦争のために一氣に土崩瓦解してしまつたのだから、從來の考へ方

ドイツイ流にむづかしくいふと世界觀、英國流にいふと Outlook

を根本から叩きなほす必要に當面した。抑留所半年の生活はこの意味から考へるべきとする暇を興へて呉れたが下手の考へ休むに似たり、到達した結論は死ぬま

彼等は別段學校教育を受けたわけではない。第一次歐洲大戰當時の評判がよかつた頃日本船から下船し來る領事館や大使館のお世話にならず腕一本で、外人の間で叩き上げて來た人達だけに、覺悟が

違ふ。飽くまで獨立獨歩だ。しかも氣持はどきどき謙遜だから

英語で手紙を書いてやつたり、屈けを書いてやつたり、新聞の解説をしてやる記者團を丸で印度のマハラジャでも扱ふやうに大事にして呉れる。朝は寢床にコーヒ

ンヤンは刑務所の内で天路歷程を書いたし、太史公も平原君傳の最後に「處聊窮愁に非ずんば亦書を著はして以て自ら後世に見はるゝ能はず」と平原君の遺著處氏春秋十五篇に敬意を表してゐる。

世界一通信社

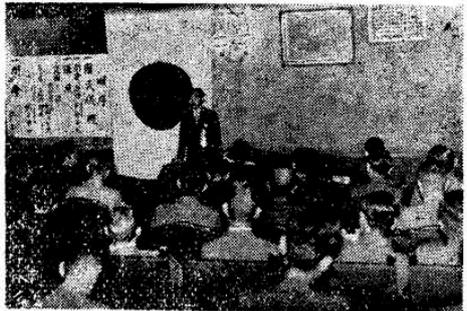
五月の終り頃から營養の不足が段々身體にこたえて來て、所謂 General run down に陥りさうだつたけれど當局初め皆さんの御計らひでかうして無事歸國してみると、過去半歳の抑留生活、更に遡つて滿五ヶ年に亘るロンドンの生活は一個人の小さな立場からいふと色々爲めになつたと振りかへつてしみじみ有難く思ふ。高いペン

敵國より特派員諸君元氣で歸る

暴虐英米蘭の官憲により一時抑留所に捕はれの不自由を味はつた特派員諸君はさきに比島において抑留所脱出に成功した牧内正男君について英米外交官交換船に同乗を許されたアメリカ組およびイギリス組はそれぞれ元氣に満ちて祖國に―われらの職場に歸還された英米官憲の冷い處置にも氣落ちせず、心身ともに健康を保つて潑刺たる若さに歡喜の情をほころばしつゝ、歸られた前特派員諸君の全員を迎へ得たことは邦家のため、大

同盟のため至大の歡びである。八月〇〇日(昭南まで淺間丸、昭南―東京本社機にて)

- | | |
|----------------|-------|
| 前華府支局長 | 加藤萬壽男 |
| 八月二十日(淺間丸にて) | |
| 前紐育支局長(長) | 稻本 國雄 |
| 同 | 寺西 五郎 |
| 同 | 木下 秀夫 |
| 同 | 安保 長春 |
| 前桑港支局長 | 秋山 慶幸 |
| 同日(コンテ・ベルデ號にて) | |
| 前墨西哥市同 | 久野 茂男 |
| 前リオデジャネイロ同 | 椎野豐 |
| 九月二十七日(龍田丸にて) | |
| 前倫敦支局長(長) | 長谷川才次 |
| 同 | 皆藤 幸藏 |
| 同 | 幸藏 |
| 同 | 譽四 |
| 前新嘉坡支局長 | 筒手 譽四 |
| 十月九日(鎌倉丸にて) | |
| 前孟買支局長 | 嶮山 芳郎 |



前バタビヤ同 安藤 利男

経済局主催の經濟通信讀者招待會(十月二日レインボウグレル)における長谷川、皆藤兩氏講演會、寸

マン島での收穫
大東亞戰の始つた昨年十二月八日から六日目の十三日、記者はスコットランドとアイルランドとの間にあるマン島に抑留された。抑留所には同勢九十餘名の日本人がゐて、二棟の安ホテルに分宿したが、記者は特に船乗りさん達の招請を受けて、一棟の家長 House Captain になつた。「新聞屋さん一つ面倒を見て下さい」と朴訥な船乗りさんに頼まれた時には、大袈裟な言ひ方だが、全く「人生意氣に感ず」だ。五十人の炊事から家の掃除その他の仕事をどういふ仕組みでやつて行かうかと、その晩は一夜まんじりともせず考へたが、翌早朝起きて炊事場へ行つてみたら午前五時だといふのに船乗りさん達が三人までも起きて早

かといふ珠玉のやうな人格に接したのが、抑留生活の第一の收穫で、次が衣食住の各分野に亘り、文明病を清算しての目玉。二の收穫、第三は可なり讀書が出来たといふことだ。きはものの雜書は別としてグリーンの英國民史は二度讀んだし、フィッシャー教授の歐洲史、トレゼリアン教授の英國史、モーレー聊のグラッドストーン傳、バツクル・モンベニのデズレリー傳、ブルターク英雄傳の英譯等々だ。外に唐詩選を毎日一つ覚え、詰將棋を一題づつ解く計畫を樹てたが、詰將棋は忽ち題切れになつてしまひ唐詩選の方は計畫倒れに終つてしまつた

古野社長が何時だつたか、「別荘」に入ると五月蠅いお客もなし好きな書物も讀めていゝだらうといはれたことがあるが、抑留生活で社長の「卓見」に感心した。バ

記者鍊成會に参加して何を待たか

全期六十四日の苦行敢闘とその收穫

編輯局政經部 桒 瀨 敬

八ヶ岳收穫を基礎に

もう二旬に近く鍊成を續け八ヶ岳には既に秋風が立初めて朝夕肌身に幹々と涼氣がしみる頃となつてゐた。日本アルプスを繞らす雄大な大自然の環境に身を置き、母なる大地と四つに組み、農民魂の體得に必死となつて精魂を打込んだ勞苦の草々が懐しく想はれる。天龍川上流の清流に裸すれば自ら清らかな、大らかな心となり、天地返しに聖氣を振れば、しかと大地を踏んまへる心の雄渾さを知る。それは自然を味ふといふ生温るい言葉で表現するよりは自然を闘ひ取るといふべきで、積極的に自然の心を心とし、土に生き土に死す人間の在り方と天地自然の悠久さを身を以て味つたのだつた。

かくして新聞記者道確立の念に燃ゆる四十有七の同志の胸に何か得たぞといふ確信と、複雑な言ひ知れぬ感慨がもたらされて第一期鍊成を終り八ヶ岳山麓の修練道場を下つたのが八月八日であつた。

この感激の日帝都に第一歩を印した我々は宮城二重橋前に整列し聖壽萬歳を奉唱、思想戰士として大東亞聖戰遂に挺身する固き決意を新たにし、心身共に斷じて裾下の舊阿蘇でないとの信念に燃えて川崎市郊外の厚生津田山修練道場に入り、鍊成は愈々第二期知的訓練に突進した。

第二期鍊成のスケヂュールは八月八日から九月十三日までの四旬に亘り講義、見學、座談を主に知的訓練がなされ、八月八日から九月七日までの一ヶ月間は津田山道場を中心に、その間宿舎の都合で十八日から廿四日の一週間は女子會館で、九月七日から十三日まで日本青年會館で眞摯な鍊成が續けられたが、津田山での日課は

朝五時 起床
五時半 禮拜、體操
六時 朝食
八時—十一時半 講義
十二時 晝食
十四時—十六時半 講義
十八時 夕食
十九時—二十時半 靜修に座談
二十時半 禮拜
二十一時 就寢

擔ふ祖國日本の姿への新たな認識と、それらを通して思想戦の中核として我々記者に課せられた國家的使命の再確認にあつた。まづ我々の祖先傳來受繼いだ血に脈々と流れる日本精神の再認識が紀元萬葉の古典を通じ詳細に検討されたが、古代日本人が如何にもすなはに自然と共に生き、自然と共に生成發展の経過を辿つた生き方や物の考へ方を識り、二旬に亘る八ヶ岳の農耕修練で自然と闘ひ、大地自然の心を心とすることに覺めた我々の胸に幾多の示唆深いものが投入された。不知不識のうち我々の見方考へ方は米英流に染まり唯物的、自我的世界觀の洗禮を受けてゐたのではないかと私に心に問ひ、社會の木樵と自任する我々も果してこれに洩れてゐないことを知り大いに反省する所があつた。

この世界的大規模の武力戦並に建設戦を闘ひつゝある秋、政治に、經濟に、文化に、急激な轉換が好むと好まざるとを問はず、我々の目前でなされてゐるのだ。我々はこれら各般に亘る國家活動を挺身指導し、日本の世界觀を基盤とする正しき指向を持たせなければならぬ重大な責務を痛感した。

思想戰士の心構へ
次いで轉換に次ぐ轉換と日まぐらしい、飛躍的進展を遂げてゐる政治、經濟、文化の現状は如何にと企畫院、大藏、商工、陸海軍の要路の擔任者からそれぞれ現下喫緊の重要國策につき隨意なき解明と批判がなされ、祖國日本の在りの儘の姿が浮き立ち國情に對する新たな認識を深めた。

然らば思想戰士である我々は、この時局下我々に課せられた重大使命を達成するには如何なる心構へと方法を持たねばならないかと思想戦論を中心に情報局、陸海軍報道部員並に都下各新聞通信社の幹部連と膝つき合せて懇談が遂げられ、松村情報局長第二部長の「長期戦々々」といふは換言すれば武力戦の停頓状態の謂で、飽くまで武力戦は主的存在を保つに相違ないが、この停頓状態の打破に向つて猛然爪牙を顯すのが思想謀略戦なのだ、この秋こそ一億國民が心せねばならない」との寸言にも含み深いものを感ぜ、かの第一次大戦に戦國では常勝軍の名を擲したドイツが如何して一敗地にまみれたかを今更ながら深思した。

見學は八月十九日に松戸工兵學校に赴き工兵の各種演習を參觀
廿一日 築地魚市場
廿四日 放送局
廿六日 情報局並に首相官邸
この日東條首相、谷情報局長に面接、首相から二億國民を眞に一心一志聖戰遂に邁進せしむるは報道戰士たる諸君の榮譽ある任務」との激勵の辭あつて引續き官邸大廣間で催された茶話會に出席す。なほ廿七日静岡縣三島郡龍澤寺から中川禪師を迎へ十九時から座談を實施、只管數息觀の無量三昧境に入る。

記者訓練生

退所式を舉行

日本新聞會の肝入りで去る七月二十日結成された「第一回新聞記者中央長期鍊成會」は酷暑のなか八ヶ岳農村修養道場で鋤鋤を揮ひ、或は清冽な天龍川の流に裸で行ひ、身心兩面の鍛錬に勵んだ、川崎市津田山修練道場で新聞記者としての知的教育を、東京日本青年會館で新聞の歴史と將來について新聞界の權威者から講演講習をうけ、六十四日間の鍊成を完了し、二十一日午前十一時から退所式を行つた。定刻式は國民儀禮、訓練生に修了證書授與、小隊長として期間中訓練と指導に功勞あつた宇野(合同)、藤井(北日本)、西村(中國)、秦(朝日九州)の四君に表彰状を授與、田中新聞局長挨拶、來賓として奥村情報局長の祝辭があり、訓練生代表西村靜一君(中國新聞)が答辭を述べて正午式を終了した。

再び肉體訓練を

尊い十有餘の犠牲者を出しても我々は進みに進む。我々の闘志に些かの弛みがあつてはならぬ。かくして三十名の同志は九月十三日武蔵野の一隅、世田谷下祖師ヶ谷の三橋體育研究所に入所した。こゝでは僅か四日間の修練ではあつたが、サーカスの動物のやうに言はれる儘に動き、肋木攀ぢ、箱跳の跳躍、綱登り等に汗を流して敢闘するうちに「運動が運動を生み氣魄が力を産む」だの「もの言はぬ肉體にものを言はせる」等三橋所長が常に口にする言葉が幾分理解出来るやうになつて來た。それに林間に板床を張つた露天食堂に主人の風流味が偲ばれて居心地も次第によくなつて一かどの體操家になつたやうな氣もしたものだつた。

十七日殘惜はあつたが同研究所を去り、日本青年會館に再び戻り、同夜直ちに鍊成終了の敬虔な奉告を神宮に告げようと西下翌朝檀原神宮に參拜、宇治山田神都教學館へ一泊、翌十九日早朝仲秋の冷氣をうけて五十鈴の清冽に身を清め、皇太神宮に詣で、報道報團を誓つた。次いで二見ヶ浦、鳥羽を見學、歸途につき二十日早朝東京着、一日休養をとり廿一日晴れの閉會式に臨んで無事解散した。全鍊成六十四日を回顧すれば全く夢のやうで得難い體験を重ね、貴重な青春の一頁であつた。

職員會彙報

吾等は與へられた秋季新

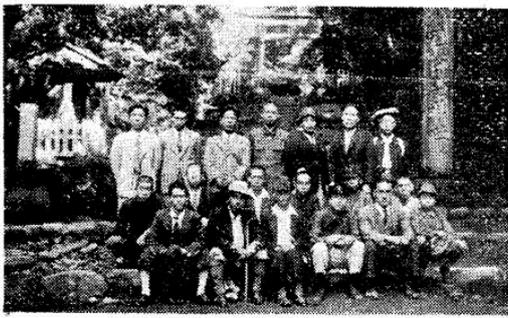
聞休日に斯く善處した

(各支社局報告による)

平泉寺詣

— 福井支局 —

福井支局では九月二十四日の新聞休日、泰澄大師開基の名刹、縣下大野郡平泉寺詣の遠足を行った支局全員に福井新聞や郵便局の無電係の方も参加しての隣組遠足といふなごやかな催しである。越前電鐵勝山驛で下車、九頭龍川の清流が岩に白く砕ける大野盆地をたどり行程約三里半、やがて目的地平泉寺の山門に着く。法燈ほのぐらい堂奥に、古色ゆかしい寶物殿に、千有餘年の同山の興亡史を偲び、秋の夕陽が山狭の薄霧を刺す



(福井支局の旅行會)

頃歸路だったのであつた。(福井支局報)

可愛山陵參拜

— 鹿兒島支局 —

鹿兒島支局では二十四日の休日可愛山陵參拜を志し、支局員ならびに同報無電係一同が打揃つて日の丸辨當を携帶、川内に向つた。午前七時三十分西鹿兒島驛發、同九時川内驛に到着した一行は直ちに徒歩で新田神社(可愛山陵)に參拜皇軍將兵の武運長久大同盟の隆昌ならびに吾等の責務完遂を祈願した。かくて一行は川内附近の山野を跋涉して有意義に一日を過ごして夕刻歸市した。(鹿兒島支局報)

勤勞奉仕

— 關門支社 —

關門附近は過般の災害の中心



にさらされたところであるだけに關門支社では二十四日の新聞休日は娯樂行事を廢し災害地復舊工事の勤勞奉仕に一日を過ごした。午前七時輕裝でりりしく支社前に集合した全員は社旗を先頭に辨當を積んだりヤカーを駈りに、列を整へて市役所指定の勤勞奉仕場所の災害地に向ふ。七時四十分目的地に到着、本職の勞働者に伍し筋肉勞働に汗を流す。かくて罹災者から多大の感謝を受け、午後二時一先づ作業を打ち切り、附近の松林に入つて一同和氣譚々、座談や奉仕の勞苦をねぎらふ福引等に與じ午後四時萬歳を三唱して散會、疲れた足をひいて家路についた。(寫眞は勤勞奉仕を終へて現場における記念撮影—下關要塞司令部許可濟)

愉快かつた 春川茸狩行

— 京城支社 —

九月二十四日の新聞休日、お彼岸のよき日、われら京城支社の一行三十餘名は紅二點を加へ、服装も輕く、颯爽と江原道春川へ松茸狩に出かけた。七時二十分城東驛を發車する。山麓を流れる漢江の水は全く清冽そのもの、水は満々として緩く流れ流筏が浮んでゐる。一幅の山水畫として全體を躍動せしめる。やがて春川についてわれらは江原道廳廳舎のお迎をうけ、一日に三回しか往復しないといふ京春バスの一臺を獨占して町外れの鳳儀山の尾根嶺の山に登る。案内人に茸狩の豫備知識を與へられわれらさきに松林の中に飛込んだところ、口八丁手八丁の記者諸君も茸狩は國民學校の一年生、日頃の口ほどにもなく、山頂からひびく鐘を合圖に目的の畫食所へついたとき、皆の風呂敷の中には二つ三つしかころがてゐなかつた山頂で畫食後一同山を下つたが、このまゝでは家に戻れんと家族持ちは百匁一圓十錢(京城では一圓三十錢)の松茸をわざ／＼買込んだりして久方振りに心ゆくまで自然の風物に接したわれらは和氣譚々午後五時半春川發京城に歸つた。(京城支社報)

臺北支社の鍊成

日に月に發展的生長を遂げつゝある臺北支社における職員會は體育鍊成部(ピンポン、野球、強歩の三部)を設けて酷暑と流行の熱病を克服、報道報國の實をあぐべく他流試合に野球で惜敗すれば、ピンポンで大勝する等全員體育鍊成に努め、益崎支社長を始め全職

員、大々建設戰完遂の意氣物凄なものがある。



(臺北支社ピンポン競技)

青年團彙報

大阪支社青年團 夏季集團鍊成

大阪支社青年團では銃後報道報國に挺身する青少年報道戰士の、より健全なる心身の鍊成を期し、今夏酷暑に敢然挑む調期的行事として夏季合宿鍊成會を舉行した。即ち淀川畔の大阪同盟寮に團員がともに働きともに寝ね、文字通り一つ釜の飯を喰ふ同志として起居寢食を共にすべく七月十三日より四十日、毎回約二十名強宛六組に分れ、連日逞しき集團鍊成を行つて八月二十三日男子第四班を殿に有終の美を全ふして閉會した。百五十名の團員は男子四班、女子二班に編成され、各班とも班長や敵前渡河競争などを演じ逞しい青春圖譜を展開した。

正な規律に服し、しかもつとも愉快な集團生活の滋味を満喫したのであるが、大體一日の鍊成は午前五時半の起床に始り朝の行事後一同出版社勤務し、午後四時半支社を出發して、同盟寮に歸宿し、勤勞、鍊成、講話その他の午後九時半就寢まで睡眠時間八時間を除く全時間を最大限に活用した。多少無理があつたにも拘らず、各班とも猛暑にめげず皇軍勇士の勞苦を偲びつゝ、嚴格なる規律の下に秩序整然たる團體行動に終始し夜間は支社長、各部長からの有益な各般の講話や趣味講座等に修養と知識の向上に努め、或は豊かな情感を養ひ、或は各自それぞれ打寛いで遊戯に、レコードに、ニュース映畫に團樂の一刻を過ごすのであつた。社から寮に歸つては寮内外の清掃や除草を行ひ、或は寮裏庭の特設土俵上に肉彈相搏つ眞摯な敢闘振りを發揮したり、時に大淀の清流にザンブと身を躍らせて海國男子の腕の牙を競ふなど大に鍊成の効果を昂揚した。中でもつとも効果のあつたと思はれるのは男子班の早朝四キロ駆足行進で、白鉢巻に半裸の勇しい掛聲は早曉の冷氣を衝いて街の名物となつたものである。又この鍊成會には〇〇部隊の豫定にない飛入りがあつて毎火曜の映寫會とともに鑑賞し、親しく交際し得たことは純眞な團員達に好個の刺戟となつたことは争へない。そしてこのさゝやかな慰問に將兵の豫想外の感謝を受け、かつお禮にと〇隊長自ら當番兵を指揮して苦心の作になる見事な西瓜を多數頂戴して團員は大喜びであつた。鍊成最終日の日曜日は淀川上流十二キロ耐熱行軍を強行して、最後の頑張りを見せ、隨所に騎馬戦や敵前渡河競争などを演じ逞しい青春圖譜を展開した。

非常連絡演習

釜山支局

時局下空襲時に處する通信連絡と新聞發行の備へはよいか一空襲下の同盟釜山支局と釜山日報社聯合の宣傳任務完遂の想定下に八月八日早朝第一回非常演習を行つたその日午前突如訓練警戒下に入るや機部支局長以下午前七時半までに全員ゲートルの輕裝で緊張集合を終つた。

一方釜山日報社においては服部副社長以下全社員午前七時までに所定の部署に配置し待機の状態に入つた。この間慶南道警察部からは松永警察部長、早瀬高等課長以下指導幹部が演習本部に陣取り、刻々に演習想定の下令あり、午前九時には訓練空襲警報、焼夷彈落下、爆彈の強襲など刻々の想定情報に同盟は執務不能の状況に陥り直ちに某事務所に移轉を行ひ隣りに間に假事務所を手際よく事務を開始した。釜山日報社移動編輯班との連絡にも好成绩をあげ、全支局員凱



前線 だより

病窓に秋を知る 中支派遣第一六三四部隊 菊池 猛

拜啓 朝毎に楊柳の病葉が病室より一葉、二葉散り込む頃となりました。御一同様にはますます御元氣に専心報道任務に御精進の御事と遙察申し上げます。下つて小生の

歌を奏して午前十時この意義ある演習を全く終了した。(機部報)



互助會報告

【九月分】

- 結 婚 吉村 勉 大坂 夫人病氣 德永 丈助 大阪 夫人病氣 平野 正一 大阪 夫人病氣 佐藤 剛 大阪 夫人病氣 出生 半谷 高雄(編輯) 長女 吳 仁善(京城) 長女 望月 七郎(同) 長女 岡本 一男(平壤) 次女 下條彌一郎(富山) 女 熊木 啓作(經濟) 長女 京谷 定茂(京都) 次男 河口 憲三(熊本) 第三子 金子 正夫(名古屋) 長男 吉岡 昭(編輯) 長女 松岡 榮吉(北支) 第三子(七月) 高橋 定(高雄) 同 第三子(七月) 松尾 啓介(同) 第一子(同)

入營・應召

- 齋藤 鐵生 企畫 瀧村 重俊 經濟 山本 孝 長崎 坪田 福男 大阪 伊東 日出夫 大阪 澤村 三樹郎 同

見舞

- 吉村 勉 大阪 夫人病氣 馬淵 謙一 編者 本人同 新田 良藏 編者 次男同 富田 市之進 編者 本人同 井上 讓 大阪 夫人同 長島 文男 編者 夫人同 横井 雄一 同 夫人同 成田 重三郎 同 同 桑野 順平 同 同 桑田 寛治郎 通信 同 真田 秀雄 鹿兒島 暴風被害 鎌田 義雄 高知 本人病氣 大嶽 保衛 大阪 夫人同 齊藤 光三 釜山 夫人同 濱本 禮子 大阪 夫人同 桑井 晴雄 高知 本人同 酒井 晴雄 高知 本人同 中澤 貞雄 高知 本人同

俳句の會案内

井泉水門の小澤武二氏(調査部)を圍んで俳句の會を始めましたから、どなたでも御参加下さい。會費は要りません。各自五句内外携帯することになつております。 ▲第一回句會作品 (八月二十三日於小澤氏宅) △メンバー互選句 四點 投入のあけびづるゆれゆれて宵 支彦 三點 獨居の灯せば紙魚のとくはえる 武二 同 夏尾根の霧に濡れ立つ處女はも 正治 △小澤氏選句 岩燕翔けめぐる岩を仰ぐのみ

南方各地に轉戦

木谷徳三郎 南方派遣高第八三〇一部 隊武田隊 御無沙汰して居ります。皆様元氣で社務に御盡瘁のことと思ひます。小生十二月八日以來武運に恵まれ南方各地に轉戦、至極元氣です。持論の南方策實現に欣然たる所です。只今あるところは誠に物資豊富で、此方から内地の皆様に慰問袋を差上げたいくらあります。また銀座の千足屋の果物、耕一路のコーヒなど、ここではクソ喰への有様です。

目なかひの海と向日葵風立ち 同 夏はゆく香に立つセロリわが食めば 同 前裁の青柿ゆれて秋立ちぬ 早市 草の香や問うら盆なほ暑き 忠彦 御加入希望の方は左記内規御一讀の上左の面々のいづれかに聲をかけて下さい。はがき投稿は解説部青山宛に願ひます。 整理部 安達 外經部 谷 調査部 齋藤(支)内經部 山崎 情報部 高須 解説部 青山 同盟俳句會内規

一、本會は同盟通信關係の俳句作家を糾合し、會員各自の體得せる俳句を基礎として戮力「同盟俳句」を創建し、刻下新行動の胎動期にある俳壇の推進力として皇道文化創造の一翼たらんとを期す。 一、本會は現俳壇の如何なる流派にも隷屬せず。但し會員個人として各流派に關係することを妨げず。 一、本會は毎月一回例會を開催す。その席上一般俳句を研究し、併せて各自作品の検討をなし、又は即吟を行ひて句作の練磨に資す。 一、會員の作品は各派の機關誌以外の適當なる機關を以て隨時發表す。

編輯 市政會館の同盟綜合大編輯室は正に東洋一だ。白雲の三尺四方の大角柱が二十餘本林立する間に勾配ある天井から下つた八十餘個の百五十燭電燈が夜晝輝いて、ここには不夜城の形容も當らない。音、音、音波の氾濫は二六時中絶えるひまもなく馴れない間は喧騒の坩堝である。音波の發生源は電話、タイプを横綱に、無電音輻機、歩行者の靴、雜誌者や訪客の聲帯がこれに次ぎ、その他椅子を動かす音や呼ぶ聲、答へる聲等々が騒音を交錯せしめる。三百坪の大廣間は深夜を除きデスクの間を縫ふ歩行者が絶えないのは仕事柄やむを得ぬ。同盟編輯室はいかさまトキー立體映畫なんだ。(與)

- 永松 紀子 中支 同(七月) 小原 静雄 同(同) 松崎 武雄 同(同) 石橋 里子 下關 本人死亡 高橋 正三 大阪 夫人死亡 今川 清子 大阪 夫人同 笹島 末吉 編者 夫人同 中田 盛文 編者 夫人同 八木 一治 編者 夫人同 沼佐 隆治 編者 夫人同 森園 高義 編者 夫人同 田澤 貞雄 編者 夫人同 松田 常雄 編者 夫人同 退社 錦戸 フミ子 大阪 同 小寺 健治 大阪 同 矢野 富美香 大阪 同 赤崎 光太郎 大阪 同 龜井 光太郎 大阪 同 日下 邦夫 大阪 同 吉川 邦夫 大阪 同 小林 高代子 大阪 同 小沼 登美枝 大阪 同 原田 登美枝 大阪 同

計 金額 五、一〇圓 餘編輯 市政會館の同盟綜合大編輯室は正に東洋一だ。白雲の三尺四方の大角柱が二十餘本林立する間に勾配ある天井から下つた八十餘個の百五十燭電燈が夜晝輝いて、ここには不夜城の形容も當らない。音、音、音波の氾濫は二六時中絶えるひまもなく馴れない間は喧騒の坩堝である。音波の發生源は電話、タイプを横綱に、無電音輻機、歩行者の靴、雜誌者や訪客の聲帯がこれに次ぎ、その他椅子を動かす音や呼ぶ聲、答へる聲等々が騒音を交錯せしめる。三百坪の大廣間は深夜を除きデスクの間を縫ふ歩行者が絶えないのは仕事柄やむを得ぬ。同盟編輯室はいかさまトキー立體映畫なんだ。(與)